



追悼 岩男 壽美子 先生



岩男壽美子先生を悼む

澤井 敦

かつての新聞研究所の時代を含め、メディア・コミュニケーション研究所に40年近く勤務され、現在は名誉教授であられた岩男壽美子先生が、2018年1月11日、逝去された。享年83歳であった。

岩男先生は、慶應義塾大学文学部を1957年3月に卒業後、フルブライト奨学生として米国に留学、イェール大学の大学院で心理学を専攻され、1959年に修士号、1962年に博士号を取得された。その後、ハーバード大学人間発達研究所所員、同大学教育学部大学院インストラクターの職を経て1963年3月に帰国され、同年4月より当時の新聞研究所（現在のメディア・コミュニケーション研究所）の助手に就任された。さらにその後、1965年に専任講師、1968年に助教授、1975年に教授に昇任され、1999年3月をもって退職され、名誉教授とられた。その間、1978年より1993年までは、本研究所の副所長もお勤めになっている。研究所内ではもちろんのこと、岩男先生はまた、慶應義塾大学の文学部や社会学研究科でも社会心理学、異文化コミュニケーションなどの講義や研究会を担当され、ひろく塾生の教育に貢献された。

岩男先生のご専門は社会心理学である。研究上のご関心はたいへんに幅広く、そのひろがりには個人内の認知システムといった問題から、マス・メディアにおける暴力描写や被害者報道のあり方、異文化接触場面での葛藤や誤解などの問題にまで及んでおり、多様な領域にわたって多くの業績を残された。『テレビドラマのメッセージ——社会心理学的分析』（勁草書房、2000年）、『日本で学ぶ留学生——社会心理学的分析』（勁草書房、1988年、萩原滋名誉教授との共著）など、多くの著作が公刊されている。また、岩男先生は、「女性学」の草創期において、その日本への導入、さらに国際女性学会の設立にも力を注がれ、女性の社会進出に関わる制度的・社会的問題についての先駆的な研究を数多く著された。共編著である『女性学キーワード』（有斐閣、1997年）、そして、Free Press から1993年に出版された、*The Japanese Women: Traditional Image and Changing Reality* など、この分野においても多くの著作が公刊されている。

さらに、こうした研究に関わるご活動と共に特筆すべきであるのは、政府機関をはじめとする大学外での岩男先生の、広範にわたる、多大なるご活躍である。男女共同参画審議会会長、国連特別総会「女性2000年会議」日本政府首席代表、国家公安委員会委員、外務人事審議会委員、「皇室典範に関する有識者会議」委員など、その例は枚挙に暇がない。

最後に個人的なことを記させていただけば、筆者が慶應義塾大学文学部に入学後、2年次に社会学専攻へと進んだ1981年、三田キャンパスで、必修科目であった岩男先生の「社会心理学概論」を受講する機会をえた。「認知的不協和」など社会心理学の基本的な概念や考え方を、淡々と、しかしながら、具体的な例を交えて明快に解説される先生のお姿や語り口は、今でもある種の懐かしさとともに、はっきりと思い出すことができる。そうした先生のお姿を近年、たまたま拝見したのが、大手通販サイトAmazonの特集ページに2016年8月に掲載された、「学びこそが革新への近道」と題された記事であっ

た。そこでは2008年から岩男先生が尽力された、タンザニアに女子中学校を開設する活動が紹介されている。「長年教師をしてきましたが、まさか、自分がアフリカで女子教育に携わることになるとは、思ってもいなかったですね」と仰りつつも、岩男先生は、「教育が一番効率的な支援だと思うのです。物資を支援しても、利益を受けるのは一世代だけです。でも教育は、教育を受けた本人だけでなく、子どもや孫、そしてその周囲の人たちにも影響を与えることができますから」と述べておられる。この記事に初めて接した折、そこに添えられた岩男先生の、本当に晴れやかで素敵な笑顔のお写真を、かつての一学生としてとても懐かしく拝見すると同時に、そこに記された尽きることのない教育への思いに、いまは先生と同じキャンパスで一教員として働く身として、襟を正した次第である。

岩男先生のご冥福を心よりお祈り申し上げたい。

澤井 敦（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所長，法学部教授）



岩男壽美子先生へ 感謝の思いを込めて

萩原 滋

岩男壽美子先生は、2018年1月11日に83歳でお亡くなりになりました。その手短なメッセージをネット上で発見したのは、13日朝のことでした。情熱をもって取り組んでおられたタンザニアのさくら女子中学校への思いを綴った年賀状をいただいたばかりで俄かには信じがたく、意を決して、ご自宅に電話をかけてみました。岩男先生が出られて「そんなデマが」と大笑いになることを期待していたのですが、ご息から近くのジムで日課にしていた水泳の最中に大動脈剥離を起こして病院に搬送されて亡くなられたのだと告げられました。葬儀の日程もうかがったのですが、矢も楯もたまらず、その日にご遺体の安置された恵比寿のお宅に出向いて、お別れをさせていただきました。近親者で営まれた葬儀には、かつての教え子たちも参列していましたが、突然の死に皆が驚愕すると共に、衰えをみせることなく全力疾走で旅立たれたのは、いかにも岩男先生らしいという声が多く聞かれました。こうして葬儀は終わりましたが、4月に予定されている「しのぶ会」の詳細は未定の段階で気持ちの整理も完全にはつかないまま、この追悼文を記すことになりました。

文学部で心理学を専攻して1957年に卒業後、岩男先生はフルブライト奨学生として渡米して1962年にイェール大学で博士号を取得、その後ハーバード大学での短い勤務を経て、1963年に新聞研究所（現メディア・コミュニケーション研究所）助手に就任しています。そして定年選抜制を利用して1999年に64歳で武蔵工業大学（現東京都市大学）に移られるまで、実に36年の長きにわたって慶應義塾大学で教鞭をとられたこととなります。1981年に文学部に人間科学専攻が開設されると、研究所に加えて、文学部でも研究会を担当し、1984年からは社会学研究科の委員も兼務されていますので、岩男先生に直接の指導を受けた学生の数は、正確に把握するのが難しいほどの水準に達しています。

私が岩男先生に最初にお会いしたのは、社会学研究科に設置された社会心理学の授業を1974年に履修した時のことです。1970年に経済学部を卒業後、アメリカで心理学の修士号を取得して帰国、1973年から社会学研究科の博士課程に在籍していたのですが、最初の年は時間割の都合で履修できず、2年目にしてようやく自分の関心にぴったりの授業に出会うことができたと言ったのを覚えています。それは岩男先生が助教授から教授に昇任される頃のことでしたが、翌年も同じ授業を履修した時に、その当時、新聞研究所とアメリカのフレッチャー大学院大学を母体に進められていた国際コミュニケーション・日米共同プロジェクトを手伝ってくれないかと誘われて、現在の南館の場所にあった第2研究室2階の研究所に出入りするようになりました。1976年に博士課程を修了すると新聞研究所の研究員・非常勤講師に任用していただき、諸外国の対日イメージや在日及び帰国留学生の調査、テレビ暴力の内容分析などを一緒にするようになりました。1980年に千葉大学に就職した後も研究所と文学部の非常勤講師をしながら、岩男研究室を根城に共同研究を継続し、さらに大学院校舎7階に移った研究所に1987年に助教授として着任した後は、研究室が隣り合わせということもあり、研究や会議などの業務以外にも頻繁にお会いするようになりました。岩男先生とは2冊の共著書以外に、随分と多くの共著論文を書きましたし、社会心理学会などで何回も連名発表をさせていただきました。ただ1997年に研究所の研究教育基金の補助によるプロジェクトが新たに編成された際に、私は岩男先生のもとを離れ、自分が主催する研究プロジェクトを立ち上げることにいたしました。

私が直接に知っていたのは研究や学内業務といった領域に偏っていますが、岩男先生の活躍の場は、そうした狭い領域をはるかに超えて大きく広がり、さまざまな政府関係の審議会などで女性有識者として真価を発揮されています。主だったものだけでも国家公安委員会、外務人事審議会、男女共同参画審議会、電波監理審議会などの委員を務められた他、海外向けの英文誌「ジャパンエコー」の編集長や「皇室典

範に関する有識者会議」の委員などを歴任し、2007年秋には旭日重光賞を受勲されています。卓越した英語力と豊かな個性、独自の発想でダニエル・ベル、イシエル・デ・ソラ・プール、エリユー・カットといった海外の著名な研究者と親交を深められた他、国連特別総会「女性2000年会議」では日本首席代表を務めるなど国際的な舞台での活躍も際立っていました。いくつもの仕事を抱えて、研究所在職中はとても忙しくされていましたが、何か新しいことに挑戦したい、学びたいという意欲を失うことなく、多忙な生活の中で中国語を習ったり、書道や陶芸の教室にも通われていました。何かを学ぼうとする姿勢や向上心は、その後も一貫しており、ここ数年の日課とされていた水泳でもバタフライの習得に努められていたようです。昨年末に岩男先生からいただいたメールには「私がバタフライでエンマ大王をのけぞらせるのと習得できないうちに呼び出されるのとどちらが早いかな」といった意味深長な一節が含まれていました。

私は岩男先生が慶應を退職されるまでの12年間を研究所の同僚として過ごし、副所長や邦文紀要編集の仕事を引き継いだ他、文学部人間科学専攻での研究会や社会学研究科委員を担当するなど、残した足跡の大きさは別にして、岩男先生が学内で歩まれた道をそのまま辿ってまいりました。また2013年に慶應を退職後、立教女学院短期大学に職を得たのも岩男先生のお力添えによるものでした。定員割れをした英語科を現代コミュニケーション学科に改組することに立教女学院の理事として深く関わられていた岩男先生から新学科の学科長にと声をかけていただいたのです。こうして自らのキャリアや人生を振り返ってみると、いかに岩男先生から大きな影響を受けたかに思い至ると同時に、その存在の大きさを再認識しているところです。

岩男壽美子先生、長期にわたり、たいへんお世話になりました。改めてお礼を申し上げますと共に、心よりご冥福をお祈りいたします。

(2018年2月8日)

萩原 滋 (立教女学院短期大学教授, 慶應義塾大学名誉教授)